

2024 年度 日本社会心理学会「若手研究者奨励賞」選考経過と選考結果

2024 年度の「若手研究者奨励賞」の選考過程と選考結果をご報告申し上げます。25 件の応募があり、4 名の選考委員による厳正な採点と審査の結果、以下の 7 名を受賞者と決定いたしました。選考委員の先生方に講評をいただきましたので、あわせてご覧ください。

「若手研究者奨励賞」選考委員長 山下 玲子

受賞者（五十音順 所属学年は応募時のもの）

秋山 知也 (あきやま ともや)	Dynamic norm 再考。なぜ人々は 未来の規範に同調しうるのか？	東京大学大学院人文社会 系研究科 修士課程 2 年
岩淵 功 (いわぶち こう)	民主主義の後退とその揺り戻しに 関する実験研究	早稲田大学大学院政治学 研究科 修士課程 1 年
日下部 春野 (くさかべ はるの)	異なる関係流動性下における評判 情報流通量とその有用性－Google Map のレビューを利用した検討	北海道大学大学院文学院 人間科学専攻 行動科学 講座 修士課程 2 年
小林 右京 (こばやし うきょう)	アップストリーム互恵的行動の集 団拘束性に関する比較文化研究	大阪公立大学大学院文学 研究科 博士前期課程 2 年
崔 邱好 (さい きゅうこう)	セルフディスタンシングが促す合 理的判断における文化的影響	名古屋大学大学院情報学 研究科 心理・認知科学専 攻 博士後期課程 1 年
竹西 海人 (たけにし かいと)	全員一致による集合知: なぜ人は 「全員が納得」するまで話し合う のか？	北海道大学大学院文学院 人間科学専攻 行動科学 講座 修士課程 1 年
山田 怜生 (やまだ れい)	クラウドソーシングにおける非人 間化－研究参加者の認知に着目し た検討－	名古屋大学大学院教育発 達科学研究科 博士前期 課程 1 年

「選考過程」

1) 募集開始と締め切り

7月1日に募集開始をホームページで告知し、メールニュースでも会員に告知した。締め切りは例年通り9月30日とした。

2) 選考委員選出と一次審査

応募総数25件に対し一次審査を行った。選考委員は応募書類に記載された指導教員を除いて、理事から2名、一般会員から2名に依頼した。

選考委員（敬称略）

理事より：高橋 尚也（立正大学）、藤島 喜嗣（昭和女子大学）

一般会員より：磯部 智加衣（千葉大学）、小城 英子（聖心女子大学）

審査方法については、従来の手順を踏襲し、この時点では選考委員は互いに匿名で審査をおこなった。各応募に対して、A（優れている）、B（普通）、C（やや劣っている）を付与するものであった。

3) 第二次審査

第一次審査結果について従来の得点換算方法に従い、A評価を40点、B評価を10点、C評価を5点とし、各応募について合計得点を算出し、その後メールでの審議を行った。最終的に7件の応募を受賞対象とすることで合意し、常任理事会と理事会に推薦した。

以上

2024年度「若手研究者奨励賞」選考委員4名による講評（お名前の五十音順）

磯部 智加衣先生（千葉大学）

ご応募くださった研究計画では幅広いテーマが扱われており、好奇心を掻き立てられるものが多くありました。また、目新しい内容・方法も散見されましたので、審査をしながら私自身も学ばせていただくことができました。いずれの計画書もそれぞれによい点があると思いましたが優劣をつけなければなりませんので、何度も読み返し悩みながら評価しました。評価にあたっては、独自性・発展性の高いと考えられること、問いに対して適切な方法であると考えられること、その上で仮説をたてるにいたる過程を過不足なく明快に説明されていることを基準としました。審査者に理解してもらうに必要な情報を過不足なく計画書に納めることは、至難の業だと思います。賞の対象とならなかった研究計画においても、

確かに興味深いと感じたり発展性を感じたりしました。今後、学会や研究雑誌等における皆様の研究成果を心より楽しみにしております。

小城 英子先生（聖心女子大学）

いずれの研究も、それぞれに異なる次元で高評価のポイントがあり、ここに順位をつけることには苦勞しました。社会心理学の最大の魅力はめまぐるしく移り変わっていく社会の最前線を追いかけていく面白さだと思いますので、きっちり手堅く整った優等生な研究よりも、粗削りでも萌芽が垣間見える研究に分があったように思いますが、一方で、そのような研究は審査員の評価が分かれる傾向にあることもまた事実でした。それだけ多様な視点を内包している学会であることの証左で、むしろ評価が分かれた研究が後世から見れば社会心理学会のターニングポイントとなるかもしれません。

審査の過程で方法論も日々進化していることを知り、自分も精進しなければと身の引き締まる思いでした。

高橋 尚也先生（立正大学）

評価者は2024年度若手研究者奨励賞の審査に携わり、すべての申請者の研究計画が単体の研究としてはいずれも成立していたと評価しています。そのなかでも、奨励賞に選出された研究は、①近年の社会現象や社会問題に注目した上で、②それを社会心理学の理論から多角的に考察し、③論理的に自らの研究計画を提案するというバランスに優れていた研究でした。①は理解できるものの②が薄い場合、②が多角的でないために③の独自性が低くなる場合、②と③の論理的つながりがクリアでない場合などは、バランスの点で評価が低くなる印象を受けました。特に、②の多角的検討（いろいろな視点を考慮していた）から導かれた研究計画には説得力がありました。評価者としては、受賞者や申請者の今後の研究の発展に期待するとともに、受賞者の研究知見が、理論上の課題解決にとどまることなく、現実の社会現象や社会問題に対してより役に立つ貢献に至ることを願ってやみません。

藤島 喜嗣先生（昭和女子大学）

若手と呼ぶのは失礼ではないかと感じるほど上質で、審査者である私のほうが勉強させていただいた気持ちになる研究計画ばかりでした。ポストコロナ社会を感じさせる社会問題を、最新理論を適用して検討する計画が多くみられました。その理論的視座もマイクロからマクロまで各レベルのものが存在していました。日本社会心理学会が目指してきた方向性、多様な問題を多様な視点から検討した研究を持ち寄り研鑽するという方向性を、若い世代が具現化してくださっていることを感じました。採択、不採択の判断は容易ではありませんでした。

方法論も多彩で、新しい技法を取り入れつつ、様々な証拠から検証を試みるものが見られました。また、質問紙調査や実験法を採用したとしても、データの質を高める手続き上

の工夫が組み込まれていました。これらの配慮のおかげで仮に予測通りの結果が得られなかったとしても、科学的意義のあるデータが蓄積されるものと期待できます。今回採択された研究も不採択だった研究も、学会大会や社会心理学研究でお目にかかれるのを楽しみにしています。

以上